

福岡大学法科大学院
令和4年度B日程小論文試験
出題趣旨・採点基準

2022年度小論文（B日程）解説

設問1 本文によれば、西欧の自由とアメリカの自由の相違点はどのような点にあり、どのような理由から形成されたといえるかを述べなさい。

【出題趣旨】

本文の内容に即して、「自由」についての2つの考え方の異同を正確に読み取り、要約できるかを見る。また、その移動について、わかりやすく的確に表現できるかどうかを考えるもの。

〈解答例〉

西欧の自由は、革命により、封建社会の束縛を脱する中で形成された。人は様々な市民的自由を保障されることとなり、自由は進歩・発展の思想と結びついた。しかし、自由の享受や進歩・発展は、伝統的共同体の解体をも意味し、共同体の保護から脱落した人を生むことも意味していた。そこで、伝統の習慣を守ろうとする強い「保守」が生まれ、自由と対決することとなった。また、西欧の自由には前提としての平等思想があった。そこで、自由の側も、「保守」との対決や「進歩」に伴う格差の是正のため、平等の観点をいれて自由の内容を修正し、新たな自由を付け加え、時代に合うその再定義を行うというように、柔軟な発想を持ってきた。

これに対し、アメリカの自由は、イギリスの支配を免れたのちは、自らのうちにあるものであり、昔からあるものとして自己目的化され、対決する「保守」を持たない存在となった。進歩主義と無縁であるがゆえ、現実から遊離した政治社会思想を生み、イデオロギーとしての自由に転化した、新たな現実に目を向けるものとはなっていない。このことが、甘い銃規制、累進率の緩い税制、国民皆保険の不存在などに表れている。

〈採点指針〉

次のような点が指摘できているか（必ずしも、文中の表現に依拠せずとも可）。

- 1 西欧の自由は、進歩・発展の思想と結びつく
- 2 しかし同時に、平等の理念も忘れていない
- 3 他方、自由に対抗する「保守」が強く存在した
- 4 そこで、格差の発生に対し、自由の修正を図るという柔軟な姿勢を持ちえた
- 5 これに対し、アメリカでは、自由に対抗するものが存在しなかった
- 6 そのため、自由が自己目的化し、自由の重視のみが至上命題とされた
- 7 その結果、自由擁護のためには現実に目を向けることもいとわない

設問2 日本においては、「自己決定」(=自由)に対応して「自己責任」ということがよく言われる。本文における「自由」の概念に関する対比を踏まえつつ、「自己責任」という概念が持つ意義・問題点について、自己の考えを述べなさい。

【出題趣旨】

上記西欧とアメリカにおける「2つの自由」の対比を前提に、最近言説に上ることが多い「自己決定・自己責任」(特に後者)について、その意味や問題について自己の見解を述べさせる趣旨。もとより、いわゆる自己責任論そのものに関する賛否を問うものでなく、自己の考えることを論理的に説明しているかが重要である。

〈解答例〉：あくまで一例であり、これと異なる立場を排する趣旨でない

西欧とアメリカの自由の違いにみられるように、自由の概念といっても一様でない。ところで、日本においては、自己決定に対する自己責任ということがしばしば強調されるが、その含意は、自分で決めたことである以上、その結果についての責任は自らだけが負う、他人の援助を得ずに自分自身で解決すべきだという点にある。また、自己責任である以上、自らの決定で自らの地位が低下しても、それは自らの責任であり、他者から救済を受け支援をされるいわれはないこととなる。

これを自由論との関係でみると、自己責任の観点は、アメリカ的自由の発想に近いものといえる。なぜなら、西欧の場合、自由を平等の観点で修正することにより、ドロップした人にも手を差し伸べようとする思想を形成してきた。これに対し、アメリカの自由は、現実世界の不合理があろうとも自由を至上価値とし、税制問題に典型的に表れるように、ドロップした人に対する救済・支援という観点は考慮されることがない。自己責任の観点は、自分の決定については自分が責任を負うということであり、他者からの支援にたいし、否定的な見地が存在する。

このようにみると、自己決定・自己責任という観点は、現実世界に対する目配りが不十分な考え方と考えられる。

〈採点指針〉

解答例は自己責任論に関する批判的見地からのものであるが、肯定・批判を問わず、たとえば、次のような点が重要と考えられる。ただし、これ以外の点を考慮することを排斥するものでない。

- 1 「2つの自由」が分岐した背景を踏まえ、自己責任論は、どのような自由論を背景とするか、また、そのような背景をいかに評価すべきか
- 2 自己責任論(ならびにその前提にある自己決定論)には、どのような生理的側面(逆に病理的側面)があると考えられるか。

【採点基準】

<基本とする評価段階>

基本とする評価段階		60点満点	設問1 (30点)	設問2 (30点)
S	(きわめて優れている)	55点以上	27点以上	28点以上
A	(優れている)	50点	25点	25点
B+	(平均的レベルをやや上回る)	40点	20点	20点
B	(平均的レベルである)	30点	15点	15点
B-	(平均的レベルをやや下回る)	25点	12点	13点
C	(やや劣る)	15点	7点	8点
D	(劣る)	5点	2点	3点
F	(入学を認めることに問題がある)	0点	0点	0点